

アンドレ・モーロワ／中山真彦訳「人生をよりよく生きる技術」講談社学術文庫、講談社 1990年8月10日刊を読む(II)

## 読む技術

### 1. あらゆる仕事と同様、読書にも守るべき規則がある

第一は、たくさんの作家を表面的にだけ知っているというよりも、何人かの作家といくつかの主題について完全な知識を持つ方が良いということである。

作品の美しさというものは、最初読んだだけではなかなかわからない。若いうち本を読みあさるのは、ちょうど広い世間に出て行くのと同じで、友を得るためである。しかしいったん、これこそ友とすべきだという人が見つかったら、その人とともに世間づきあいをはなれるべきである。モンテーニュ、サン・シモン、レッシング、バルザック、ブルースと親しくするというだけで、人生は充分豊かになりうる。

### 2. 第二は、読書の多くを、名作にあてることである

もちろん、現代作家に興味を持つことは必要で、また自然なことだ。現代作家の中には、同じ不安と同じ欲求をいだく友が見つかりやすい。しかし群小作品の波にのみこまれてしまうことはつしもう。傑作といわれる本の数だけでも、全部につきあうことはとうていできないほどだ。個人の選択にはまちがいがありうるし、世代が下す評価も誤ることがある。しかし人類はまちがわない。ホメロス、タキトゥス、シェイクスピア、モリエールは、確かにその名声に値する。時間の流れの試練を経ていないものよりも、やはりこれら大作家たちの方をとることにしよう。

### 3. 第三は、自分にあつたものを撮取することである

それぞれの人には、それぞれにあつた精神の糧かてがある。自分にぴったりの作家を発見しよう。それは、まわりの友だちが読む作家とはたいへんちがった作家になることだろう。文学も恋愛と同じことで、他人の好みにはおどろかされるものだ。自分に向いているものに対して、忠実であろう。何が自分に向いているかは、自分がいちばんよく知っていることなのだ。

### 4. 第四の規則は、読書は可能なかぎり、立派なコンサートやおごそかな儀式にただようような、落ちついてひきしまった雰囲気の中ですることである

1 ページ走り読みしては、電話がかかってきたので中断し、再び読みだしても心は上の空で、ついに本を放りなげて明日までそのままというのでは、読書をしたことにはならない。本当に本を読む人は、ひとりになれる夕べの長い時間をそのためにとっておく。愛読する作家のために、冬の日曜の午後を空あけておく。鉄道の旅は、バルザックやスタンダールの小説、あるいは『墓の彼方から

の回想』を一気に再読できるといううれしい機会である。大好きなあの文句、あのパッセージ(ブルーストでいえば西洋さんざしのくだり、あるいはプチット・マドレーヌ、トルストイでいえばレーヴィンの婚約)に再びめぐりあえるのは、あたかも音楽の好きな人がストラヴィンスキーの『ペトルーシュカ』で、魔法使いのテーマがあらわれてくるのを待ちうけるのと同じほど、胸のときめく喜びである。

#### 5. 最後に第五の規則は、自分自身を名作の読者にふさわしくすることである

というのは、読書もスペインの宿屋や恋愛と同じことで、こちらが出しただけのものしか向こうからはしてもらえないのだ。人間感情の描写も、そういった感情をみずから体験した人か、あるいは、まだ年が若く、感情生活の開花を期待と苦痛をもって待ちうける人にとってしか、おもしろいものではない。もっとも感動的なのは、去年はまだ冒険小説以外はうけつけなかった少年が、突如として『アンナ・カレーニナ』や『ドミニック』に熱中することである。いまや彼は、愛する喜びと苦しみが何であるかを知っているのである。偉大な行動家はキャプリングを、偉大な政治家はタキトゥスやレッシスを、それぞれよく読みこなすことができる。リヨテは、政府が不当にも彼からモロッコをうばい上げたその翌日に、シェイクスピアの『コリオレイナス』を読みはじめるが、それは感動的な情景ではあった。まさに読書の技術とは、大部分、本の中に人生を見、本をとおしてそれをよりよく理解する技術である。

P133 ~ 136

#### [コメント]

生徒・学生のなすべきこと、仕事の一つは読書。デカルトの言う通り、過ぎし時代のもっとも教養ある人との会話である読書。フランスの読書人であるアンドレ・モーロワの読書論にも耳を傾けたい。

— 2015年11月14日 林 明夫記 —